広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

明治の革と江戸の技。前例のない掛け算で、世界を徳島色に染める。

田岡 亮祐　徳島／革職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTAクリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE／代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。徳島県選出の匠、田岡亮祐さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

1月24日、プレゼンテーションにて

プレゼンテーションの様子

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

徳島の新しい名産に挑む

徳島で生まれ育った革職人の田岡さんにとって、藍は昔から身近なものだった。田岡さんは革職人として「革と藍との高いレベルでの融合」をテーマに「藍染革」に取り組んでおり、徳島の新しい名産として根付かせたいと考えている。

世界に目をやると、藍染産業が衰退している地域もあり、上質な藍染革を作る意義は大きい。田岡さんは「藍染革を通して、藍染の可能性、かっこいい伝統文化であることを多くの方に知ってもらい、藍産業が永く続いてほしい」と話す。また、世界に藍染革の美しさを発信し、世界中の方々に徳島を訪れてもらいたいと考えている。

田岡さんの工房の外観

本プロジェクトでは、藍染革を使用するプロダクトとして鞄を選んだ。鞄は財布や小物と違い、持ち歩いている間、常に人目に触れるものであり、旅先で「その鞄はどこのものですか？」「これは日本の徳島の本藍染で…」と、鞄から会話が広がっていく光景をイメージした。

キックオフ・セッションでは、小山氏が「素朴でワイルドなカバンにしては？」と提案。サポートメンバーの川又俊明氏からも「日常使いの味わい深まるトートバッグの方向で考えて」とアドバイスした。「自分の殻を打ち破る作品にしたい」と挑戦が始まった。

藍染革の染め上がりを喜ぶ田岡さん

エリア・コンサルティングの様子

田岡さんは茶利八方（チャリハッポウ）という日本古来の山羊革と徳島の伝統である藍染を融合したトートバックを製作した。今までイタリアの牛革を使用した革製品をつくっていたが、このプロジェクトでは国産革にこだわった。

茶利八方とは、植物の渋で鞣（なめ）された山羊革「茶利革」に、縦横斜め全方向から手揉みをかける通称「八方揉み」と、乾燥を繰り返し、革の表面を隆起させることで深い凹凸を生ませた、風格ある日本独自の革である。通常、染色された革だが、革の製作者に絶対に素晴らしい藍染革になるという熱意を伝え、染色していない革をわけてもらえることになった。

エリア・コンサルティングでは川又氏が工房を訪れ、「特別な革だということをアピールして、このまま突き進んで欲しい。使い勝手よりもかたちと質感にこだわって」とアドバイスをした。プロダクトの細部のデザインやブランディングの方向性を固めた。

世界に発信したい藍染革製品が完成

明治三年、鞣（なめ）し産業では遅れていた日本。皮革技師として第一人者であったアメリカのチャールス・ヘンニクルを一年間招き、西洋の鞣しの伝習が行われた。これにより植物の渋で鞣（なめ）された山羊革はチャールス氏の名にちなんで「茶利（チャリ）革」と呼ばれるようになった。明治から続く革のつくり手が現在もいると知ったときは胸が高鳴ったそうだ。

その革を現代の名工・古庄紀治氏が化学薬品をつかわないで「天然灰汁発酵建て本藍染」で染め上げる。その後、田岡さんが革のpHを中和し油分を補う、独自の後処理を施し、総手縫い・切り目本磨きで仕立てる。今まで扱っていなかった素材の後処理は最も苦労した点と話す。方程式を掴むまでに時間がかかり、ボツになった革もたくさんあるという。

商談会の様子

悩んだ点に値段設定をあげた。貴重な革であり、手間もかかるため、どうしても高額になってしまう。川又氏に相談した際に「そのぐらいのクオリティはあると思う」「きちんとストーリーを伝えることが重要」とアドバイスをもらった。

当初は「オンオフ問わず使える男性の鞄」をイメージしていたが、革の質感のおかげで、男女ともに、世代を越えて愛される鞄になったという。1月24日に都内で行われた商談会でも革の質感に関心が集まった。

今後の展望について田岡さんは「茶利八方の藍染革が、世界で初めて実現した。まずは国内の皆様に知ってもらいたい。そして海を渡って世界中の方にご覧いただいたり、各地へ出展していきたい」と話す。

現在、日本の職人人口は減少傾向にある。鍛冶屋、工具屋、砥石屋にも後継ぎ不在の波が押し寄せている。革産業も縮小傾向にあり、茶利八方に関しても作れる職人は数人しかいない。徳島の藍産業も置かれている状況は厳しい。

「ロストテクノロジーになってしまった革はたくさんある。プロダクトを通して多くの方に藍染と茶利八方に親しんでもらい、それぞれ産業に貢献したい。『良いもの』でなければ、理解も共感も生まない。そこは僕の責任」と熱い思いを語ってくれた。

完成プロダクト「chari leather aizome TOTEBAG」

完成プロダクト「chari leather aizome TOTEBAG」

田岡 亮祐
徳島／革職人

2004年、独学で財布の製作をはじめる。2006年から国内外の革工房を訪ね歩き、渋谷の鞄職人より技術を学ぶ。2012年、実店舗として徳島市に「ghoe」をオープン。2015年から伊勢丹・阪急百貨店・SOGOなど国内各地へ出展。2016年、天然灰汁発酵建てによる本藍染革を発表。徳島市ふるさと納税の返礼品に選出。「時を経て、より美しくなる品物」をテーマに製作を行う。

天然灰汁発酵建てを行う様子

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT